

わが国の「大気中発がん物質のリスクアセスメントガイドライン」の策定の試
みについて — 3年間をふりかえって —

横山 榮二 (国立公衆衛生院 顧問)

1. はじめに

平成8年から有害大気汚染物質のうち、いき値の無い発がん物質についてはリスクの概念から生涯リスクレベルを推定し、環境基準の設定作業が進められた。そこでは主に米国EPAの手法が取り入れられたが、時にはWHOの方式も採用され、わが国の環境行政として、はっきりとした一貫性が無かったのが実状であり、現在もその様な状態が続いている。時を同じくして当学会に新たに「リスク分析分科会」が発足し、発起人が中心となって何とかわが国にあったリスクアセスメントのガイドラインの策定を試みようとの目的で、毎月1回程度の勉強会を開催し、昨年までの活動は昨年の本学会分科会で報告した。その後も活動を続けてきたが、その成果の一つが前演題の「ディーゼル車排出粒子による肺癌リスク試算」であるが、残念ながら未だまとまった方向は出していない。今回はこれまでの討論を振り返り、今後の方針を分科会会員の皆様と共に検討したい。

2. これまでの討議事項および報告者

* 昨年までの討議事項は項目のみを列挙する。

- (1) 動物実験成績をどの様に取り扱うか (1997年8月12日)
- (2) リスクアセスメントにおけるいき値について (1997年10月6日)
- (3) 変異原性試験について (1997年11月28日)
OECD合同会議出席報告 (同上)
- (4) EPAのリスクアセスメントガイドライン：過去と未来 (1997年12月16日)
動物から人への外挿について (同上)
- (5) 非発がんリスクのいき値—動物実験の結果を基にしたNOAELとBDの推定 (1998年1月28日)
- (6) 石綿曝露に対するリスクアセスメント (特に低濃度一般環境のリスクアセスメント) (1998年5月29日)
子供の環境リスクの評価に関する動き (同上)
- (7) 疫学調査における低濃度曝露への外挿モデルについて (1998年7月10日)

* その後の討議事項および報告者

- (8) 放射線のリスク管理における考え方 (小林 定喜 (放医研))

(1998年9月8日)

+放射線被曝の管理におけるリスク概念の導入から、考え方の推移について、有害大気汚染物質対策との相違点を中心に討議した

(9)ディーゼル車排出粒子によるヒト肺癌リスクの試算について

岩井和郎、秋山 薫 (東京都環境科学研究所)、新田裕史

1998年10月23日、1998年12月15日

+これまでの議論を踏まえ、比較的既存のデータがあるディーゼル排出粒子のと肺癌リスクの試算を曝露評価、疫学的評価を元に試算を始めた。

(10)生体負荷アプローチについて (和久井容子, ツムラ研究所) (1999年2月9日)

+WHOのダイオキシン類のTDI再評価の際に用いられた生体負荷量からTDIを決定する考え方について、講演をお願いしその是非について討議した。

(11)ディーゼル車排出粒子によるヒト肺癌リスクの試算について (岩井和郎) がんの疫学 (祖父江友孝、国立ガンセンター) (1999年4月27日)

+これまでの討論から、上記試算を行い、併せてがんの疫学について講演をお願いし、妥当性について議論した。その結果、修正を行い、本日前演題で発表した。

この3年間の活動を振り返ってみると、決して十分とは言えないまでも、多くの項目について議論を重ね勉強をした。しかし、米国EPAの新しいガイドラインの提案があつてから3年経過したが未だに最終報告がされないように、なかなかまとめることは困難であった。本日はその一つの例をお示ししたが、今後更に議論を重ね、皆様のご意見を聞けるような形でご報告が出来ることを願っている。